

INDEPENDENT THINKER PART1

# MARU

どこをくり回しても  
たかがスケートボードですから

面白い。楽しい。  
社会がそれだけでなんとかなるんだったら、  
それがいい。  
仙台からガゴオーっと出てきて、  
そのままアメリカまでグライドし続けている  
この男の脱線という独立。

Interview\_SO  
Photography\_WADAPP





HIROTA

NO COMPLY POLE JAM

アメリカへの挑戦というと、ちょっと違う気もするけど、アメリカと日本を頻りに行き来して10年が経ちましたが、やっぱり向こうでないと感じられないものがあるの？

MARU: アメリカのスケートボードですよ。そこでは俺はもう犬ですよ、犬。そのスケート文化っていうのに、かなわないって。本当にスケートをライフスタイルとして成り立たせ、社会に浸透しているのは、やっぱりアメリカだけなんです。もちろん俺は日本人だし、日本が大好きです。でも、俺の中のスケートボードってものをぶつけて生きていけるのは、今はアメリカしかない。政治・経済・文化すべてがパーフェクトだとは思わないけど、いかんせん、スケートボードに関してはズバ抜けてるんですよ。アメリカは。

向こうに行くと、最近ZEROのエリッサ・スティーマーとキーガン・サウダーなんかともスケートしてると聞いて、意外な感じもしたけど。そういう部分でも成長があったのかな？

MARU: もともと滑るメンツを考えて選んだりしてない。誰と一緒に滑ろうが、どのフォトグラファーと行こうが、自分のパフォーマンスをするだけです。たまたま彼らとも一緒にシューティングして友達になったんです。どこを拠点にしているの？

MARU: コンソリがサンフランシスコのアパートの一室を借りてくれてるんで、そこに。そのアパートで何人かでシェアして住んでます。みんなスケート関係のやつらです。俺の部屋は、一人の時もあれば、スペイン人のロベルト・アルマン【注1】と一緒にいるときもあります。そのアパートは、昔からスケートハウスだったんですよ。このアパートのハンドレールに、ドレホブル【注2】がテールドロップからフィーブル・グライドをやったの。みんなが、テールからかける技をドレホブルって言うようになった発祥の場所なんです。かつてその写真がアメリカなんかのADになっていましたよ。ジム・グレコ【注3】も駆け出しの頃住んでたみたいです。

じゃあ、サンフランのスケートの社交場的な感じでもあるわけだ。

MARU: それはパーティーですね。だから俺もしょっちゅうパーティーに行く。スケーターが集まってくる酒場が2、3軒あって、それら全部に顔出して酒飲んでバカやって、「オメー面白いな〜。スケート行くぞ」って言わせて、スケーターやフォトグラファーと次の日のアポを取りつけるんですよ。前の日の晩に飲みに行って、仕事をもらって、次の日に仕事する。毎日がその繰り返し。

仕事って滑ることだよな。

MARU: 俺は年俸制、要は1年間を通しての評価だから、ひと仕事いくらになるってのはないんだけど、1年間に何をどれだけ残せたかっていうのが大事なんです。そうすると、やっぱりやらなきゃいけないじゃな

いですか。

毎晩飲んでキャラ全開させる姿が目に見えちゃうよ。LOWCARD【注4】にはじまりSLAPマガジンにインタビューも載ったしね。

MARU: いろいろなツテを使ってどんどん仕事に繋がっていくんです。ロベルトなんか「頼む、撮影についていい？」って言って、車に乗してもらったり。「マル、ごめん。今日は無理だ」というときも、もちろんあるよ。そういうときは、また別の仕事を探さ。「ケンさん【注5】、何やってるんですか？」って電話したりして、「今日はモデルの撮影だよ。オメーなんか撮ってる暇ねえんだよ。プチ、ツーツ〜」みたいな、そういう日々ですよ。SLAPのインタビューは、最初にインタビューを予定してたロベルトが、運悪く怪我しちゃったんですよ。たまたま同行させてもらってた俺が2枚くらい撮れて、SLAPのフォトエディターのジョー・ブルックが「じゃあマル、いっとくか?」「い、いくつす!」みたいな。

あの写真のバックサイドにはそういう汗もあるとは!

MARU: 向こうじゃ、待ってたら予定はないままなんです。その場でこっからつくるんです。飲んで、脱いで。とりあえず猛アピール。俺はこんだけやるんだぞーって。万国共通ですよ、パーティーでヤバイやつが人気になれるというのは、おまえヤバイな、で、次の日のスケートに誘われて、スケートもヤバイな、おっ、使えるなって。俺はトッププロじゃないから、黙っててもフォトグラファーが連絡をくれるような身分じゃないのも自覚してるんで。だから、いつでも本気でぶつかってます。

観光旅行してるわけじゃないからね。そこまでして撮ったもの、残したものが、思い出写真のわけがない。ところで、サンフランシスコのシューティング事情はどうなの？

MARU: スポットは無敵ですよ。これは訪れたことがある人なら誰でも感じるはず。アメリカは広い。そして優秀なフォトグラファーは、いつでも新鮮なスポットを用意してくれています。ハンドレール系コーナー、アール系コーナーとかってメニューが分かれたスポットファイルなんかも持ってんの。それが有名になったりトッププロになればなるほど、もうお膳立てが増えてくるから、楽勝ですよ。そこから自分がやりたいとか魅せたいのをイメージすればいい。フォトグラファーは、撮影でグリッチョすることはないし、スケーターがやっぱり一番大事でスケーターありきの自分らの商売だってわかってるから、スケーターはひたすらにスポットに挑むだけっていうさ。

それは、街やそこにいる人に根付いたスケートの歴史や文化の深さを物語っているね。自分はスキルがないって言ってたけど、日本人スケーター全体のスキルは格段に向上しているよね。

MARU: 最近活躍してる日本の若いやつはかなりヤ



HIROTA

GAP TO 50-50

バイね。やつらはアメリカでも俺なんかよりもっと有名になれると思うよ。

でも、MARUの名前を知ってる人の方が間違いなく多いよね。それは他の人と何が違うからなんだろう？

MARU：やっぱり、みんな捨てられないんじゃないっすかね。スケートボード以外のことを。俺は自分の実力の天井が見えたときから、あとは他を削ぐしかないって覚悟して、スケートをやるために他のことを削ぎ落としてきたんですよ。チャンスを逃したくなかったし。

スケートでのチャンスというのは？

MARU：包み隠さず言いますけど、日本人っていうキャラをフルに生かしています。これはマジで使える。きっと俺がアメリカ人で、この実力だったら相手にされてないかも。日本っていうのはそれだけ魅力のある国なんです。経済的にもそうだし、文化的にも。みんなが思ってる以上にアメリカ人は、日本をリスペクトしてるし、注目してる。だから、俺はそこを取っかかりにした。普通はそのチャンスすらもらえないんだからね。それをチャンスだと思いました。

じゃあ、アメリカに行きました、チャンスを生かしてSLAPにも登場しました。そして、今度はそこから何を？

MARU：岡本太郎 [注6] の真似してるみたいで嫌だけど、自分で何かを達成した時点で、それはもう無意味なことなんです。その何か、物でも写真でもスケートのキャリアでも、とにかく次へのために、それはトイレに流しちゃうんですよ。ジャーって。むしろ大切なのはそこに到達するまで

の過程で、それはいつまでも自分に残るものだから。そして、次はもっと大きいことをやりたいってなる。もし、次のことをできなくなったら今の自分のスケートからサヨナラします。だってさ、下の世代にもっとヤバイのが控えてるんだから。

一般的に、自分でつくった物を自分でブツ壊して、また積み上げていける人って、すごいところまで行ける気がする。

MARU：そうかもしれない。もっとスケートより面白くてハマれることがあれば、いつでもやめていいんですけどね。でも残念ながら、ないんですよええ。

そんなスケートから一番感じる魅力は？

MARU：かっこいいデザイン性。どうでもいいようなところに情熱を注いでたりするのもいい。でも、とにかくお洒落だってこと。はじめた頃から今でも、お洒落かどうかが一番大事な基準。ちなみに、お洒落っていうのは男らしさ。俺は男らしく潔いのが好きなんです。ドレホブルが、かっこいいのとかもそう。ジタバタも右往左往もせず、ルールとか関係なく、ダメなものをつくらなくて、もっと本能的に潔く。俺は、そういう



人がお洒落だと思ふ。

それは社会的にどうかという部分ではないお洒落や男らしさだね。

MARU：そうですね。スケートを選んだ時点で、もうとっくに脱線してるわけ。今さら社会がいう一般常識なんてクソくらえでしょ。今まで散々好き放題やってきたんだから、自信持ってこのままだけいかな。もちろん、それなりの仕打ちはたぶんあるよ。スケートのために他を削ぎ落としてきたことも多いし、それなのに自分のスケートができなくなったときは潔く線を引かなくちゃいけないんだからね。人生は映

画のように、もう戻しはきかないし、なんつうんだろな、恥ずかしい姿は許されないんですよ。そもそも、生まれた時点で死へのカウントダウンははじまっているんだし、だったら無駄な瞬間はないわけで、やれることを今やらなかったら、いつやるんだ？ってことです。DEATHをMIXさせるんです、人生に。そしたら本気になるでしょう。その気持ちはスケートをはじめたガキんちよの頃から変わってない。

やりたいことも、それによって失敗することも成功することも、いつか棺桶に入ってしまうまで全部が自分の実験。自分自身が、自分の人生の実験なんだからって思っているけれど、そのDEATHMIXっていう考え方は非常に興味深いですね。

MARU：昔、食卓に常にドクロの絵を飾ってた文明があってさ。食卓というのは、家族が集まってメンを食う一番幸せな場所のはずでしょ？そこにドクロ、いわばDEATHを飾ることによって、死を思い、生きてることへの実感をする。彼らは、だからこそ、人はより一生懸命に楽しく生きられるって考えたらいいんですよ。それが俺の中のDEATHMIX。でも、実験台っていうのもすごいわかる。

じゃあ、若い子がどんな実験を自身のためにするのにも楽しみだね。

MARU：その意見に乗るっす。例えば、THRASHERのアンチヒーローの広告にいきなり日本人が現れました。アンチヒーローのトップライダーに日本人がなりました。そんなのを見てみたい。(こいつ、アンチヒーロー

なったんかい。ハンパねえ〜)って。誰かはわからないけどさ、例えば、ショウタ [注7] に、ガネコやマロやユウスケとかが、そういうことを本気で思ったらいと。大阪のユウスケ(高澤祐介)と初めて会ったのは、クレーチャーのツアーのとき。外人も俺もむちゃくちゃで、勢いとかそのノリに圧倒されちゃって、やつは全然いいところ出せてなかった。悶々としてるのはわかったけど、それをこっからどうするかではないじゃん。で、やつが大阪に帰らなくちゃいけなくなると、(ここで俺は最後だ!) みたいなそんな日に、潰れたパチンコ屋にあるハンドレールに行って、いきなり一

人でやりはじめたんですよ。尋常じゃないくらい。そこはメイクした後すぐに壁があって、ユウスケの顔面とか体も壁にグチャツコくなってんの、ずーっとやめないんですよ。俺はそれを見て泣きそうになって、(もういいよって。そんな…わかったよ)って。やつはスケートで心を動かされたし、それまでビクビクしてた若手だったのに、あの日、ダレン・ナバレッティ [注8] をかっこいいって思うように、心の底からユウスケのことをかっこいいって思ったんですよ。(同じ匂い。こいつ男だ。ただじゃ、死なねえぞ) みたいな。それがスケートの面白さにも繋がるんだけど、どんな下手クソでも魅せられるし、こんな俺ですらヒーローになれる瞬間があるし、自分にしかできない動きもあったりする。あの日ユウスケのフロントサイド・ボードスライドもそうだった。いいエピソードだ。そして、ここがMARUのいいところのひとつでもあるかもしれないね。ちゃんと人を認められるというか。自分というものをすごく持っているというわりに、他の人のいいところを認めれない、見つけられない人もいます。その時点で、「自分がある」ということに限界がある。

MARU：そう。なぜかっていうと、おかげさまで俺はスケートが下手クソだから。でも、かっこよさで負けたことはない。男らしさっていうお洒落はそこです。

人間・丸山晋太郎がスケートに巡り会ったからこそだね。MARUのいうお洒落も男らしいも全部はそこから。他にもスケートには、自由、ノンルール、オリジナル、スタイルっていう感じのいろいろとあるけど、インデペンデントっていう響きは？

MARU：ちなみに今のスケートにオリジナルって議論を持ち出すのはナンセンス。だって、俺たちがスケートを発明したんじゃないもん。それよりインデペンデントっていうのが、しっくりくる。独立と脱線は俺の中では限りなくイコールなんだ。自らの意思で離れたような感じ。ブレるじゃないですか人間って。つらいことあれば甘えちゃうし、いいことあれば調子こいちゃうし。もともと人間というのは、そういうスケッチャーなブ

レを持ってるもの。だからこそ、絶対にプレチャイけない部分っていうのもあるじゃないですか。そういう俺に残された最後の道徳心、宗教ってのがスケートボードなんです。例えば、撮影についてだったら、無秩序、ノンルール、バレなきゃいい、だったらなんでもアリじゃないですか。でも、なんでもアリにはならない。だって、他人がやったスポットで同じことやって、雑誌になんか絶対に出れないし、出たくないじゃん。そういうね、最終的な道徳心をスケートがわからせてくれるんです。それはルールではなく気持ちの問題。(誰にもバレないよ、黙ってれば。言わなきゃわ



かんないよ)、そういうのが気持ち悪いんですよ、俺は。そういうのが気持ち悪いっていうのはスケートが教えてくれたことなんです。ましてや、手を抜かない、一度手を出したらメイクするまでやめられないとか、スケートがプレチャイけないと教えてくれることは、撮影ひとつにしたってたくさんある。そういう、人にバレなきゃどうでもいいのに頑張っちゃう自分っていうのは、スケートっていう宗教みたいなものだと思ってしまうわけです。だから、俺は独立できるんだって思うんですよ。そんなんだから、普通の社会ではそれ以上に達成感やドキドキやワクワクなお洒落を体感できるわけがない。だったら、出て行くしかなんです。自分の意志で、脱線という独立です。傍から見たら、ただ

のはみ出し者になっちゃうだけかもしれないけどさ。得られる快感だったり、積み重ねて得られるものだったり、人間関係だったり、作品とかそういうことまでも、全部がスケートと出会ってしまったおかげです。

そのスケートによって我慢したり窮屈になっていることはないの？

MARU：俺はないです。金はないし、嫁に文句いわれるし、怪我もするし、でもまったく我慢してないんですよ。それが結構構わないですよ。それは本当に俺らの非常に危ないところなんです。だから、後付けみたいで実は後付けじゃないんですけど、

INDEPENDENT っていう刺青を23才のときに彫ったんですよ。こうやって、社会から脱線してしまつところに独立の印を彫って、俺の独立記念日にしたんです。もうこうなったら、ごまかせないですよ。でも、スケートのおかげで、滑りをごまかすことはできない自分だから、それがもうすべてに当てはまるようになりました。お洒落とか男らしさとか、そういうのも全部が全部、インデペンデント。

インデペンデント、MARUの中のインデペンデント。それはスケートというものから踏み込んで宗教観の話にも発展させることができるものだね。

でも、すなわちそれはスケートに魅せられた者の人生観とい

う、今までもこれからも延々と様々な街で語られてきたことなんだよね。これには終わりが無い。終わりが無いことがまた実感できたのもいい。だから、質問はこれで最後にするよ。つまり、1枚の板と4つのタイヤで何をしているの？

MARU：オナニーですよ。自己表現による、自己満足です。どうこねくり回してもスケートは、たかがスケートですから。でさ、結局はその楽しさはやってる本人にしかわからない。俺は自分が気持ち良くなりたから滑るんだもん。でもそれが周りに伝わって、みんなで上げられたらいいなあ。でも人を満たすことができるのは、自分を満たした後のお釣りに思うから、まだまだですけどね。

1 Roberto Alemanはスペイン出身のCONSOLIDATEDのプロスケートボーダーで、マルとはもう何年も寝食を共にしてる兄弟のような存在。チームメイト。外国人による、アメリカでの攻め方を教えてくれた恩人。

2 Dan Drehoelについてはマル曰く「昔は俺のアイドル。いまは500CLUBってバーで酒ばっか飲んでる近所のおじさんで、VOXのチームメイト。でもやっぱり俺のアイドル」

3 Jim GrecoはZEROのアマチュアから今やSUPRA、KR3Wといった人気ブランドのヘッドライナーのひとりにして、DEATHWISHというデッキブランドもリードするプロスケートボーダー。



4 サンフランシスコのスケーター、ロブ・コリンソンが低予算で創刊したのがLOWCARD。全編モノクロでマルは写る方も撮る方も登場。

5 GOTO KEN。日本を飛び出してサンフランシスコを拠点に長年アメリカで活躍するフォトグラファー。THRASHERなどのスケートボード写真はもちろん、モデルやミュージシャンなどオールジャンル。



6 岡本太郎(’96年没)。太陽の塔があまりにも有名な日本を代表する芸術家のひとり。「芸術は爆発だ」などの名言も数多く残し、その生き方や表現力は、多くの人の心を揺さぶった。

7 菊地祥太はマルと同じ仙台出身で26才の存在感も抜群のスケーター。我如古直は20才の沖縄出身のスケートボーダー。近藤高磨は我如古とは生年月日が一日違うだけという徳島出身のスケートボーダー。これに本文中の高澤祐介も加えた彼らが、マルが大好きだという期待のスケーター。

8 Darren NavarretteはCREATURE、VOX、INDEPENDENTのプロスケートボーダー。VOX ジャパンツアーをきっかけに仲良くなり、渡米中もなにかと面倒を見られる頼れるマルにとってのTHE兄貴。



丸山晋太郎 | まるやま・しんたろう  
1980年12月25日生まれ。宮城県仙台市出身。  
スポンサー / CONSOLIDATED、VOX、ANALOG、  
BLACKFLYS、INDEPENDENT、SPITFIRE、DAF、  
ちーむにちようび、DEATHMIXSTORE、4D7S

